

子供はばかでなかった

小川未明

青空文庫

吉雄は、学校の成績がよかつたなら、親たちは、どんなに
しても、中学校へ入れてやろうと思つていましたが、それは、
あきらめなければなりませんでした。

「なにも、学校へいったら、みんなが偉くなるというのでない。
りっぱな商人には、小僧から成り上がるものが多いのだよ。
家には、なんのためにもならぬから、いいところをさがして、
奉公なさい。そして、お友だちに、まけないようにしなければ
ならぬ。」と、お母さんは、いいました。

いままで、小学校時代に、仲よく遊んだ友だちが、それぞ
れ上の学校へゆくを見ると、うらやましく、お母さんには思

われしました。

「なぜ、うちの子は、もうすこし勉強強^{べんきょう}をして、できてくれぬ
だろう？」

こう思う一方^{おも}には、また、できない我が子^{わこ}が不憫^{ふびん}になって、

「あの子^この心^{こころ}のうちこそ、いつそう、悲^{かな}しいだろう。」と、考^{かんが}え
て、なにもいうことはできなかつたのです。

町^{まち}の、大^{おお}きな呉服屋^{ごふくや}で、小僧^{こぞう}が入^いり用^{よう}だということ^きを聞^きいたの
で、そこへ、吉雄^{よしお}をやることにしました。

「よく、ご主人^{しゅじん}のいいつけを守^{まも}って、辛棒^{しんぼう}するのだよ。」と、
お母^{かあ}さんは、いざゆくというときに、涙^{なみだ}をふいて、いいきかせま
した。

子供が、いつてから、二、三日というものは、お母さんは、仕事も手につきませんでした。

「いまごろは、どうしているだろう？」と、思ったのでした。

すると、五、六日めに、ひよっこり、吉雄はもどつてきました。

「どうして、おまえ帰つてきたのだい。」と、驚いて、お母さんは、たずねました。

「上の小僧さんが、意地悪をしていられない。」と、吉雄は、訴えました。

「そんなことで、帰つてくるばかがあるか？」と、お父さんは、しかりましたが、お母さんは、そこばかりが、奉公口でないといつて、ほかをさがすことにしました。

これも、町で、きれいな店を張っている時計屋でありました。

そこで、もう一人、小僧がほしそうだから、世話をしましようにと
いつてくれた人がありました。

「ほんとうに、時計屋なんかも、いい商売だね。」と、お母
さんは、喜びました。

吉雄は、その人につれられて、時計屋へゆくことになりました。
「またつとまらんといつて、帰ってくるようなことがあつては、
近所に対して、みつともないから、たいていのことは、我慢を
するのだよ。」と、お母さんはいいきかせました。

吉雄は、うなずいて、出ていきました。やはり、二、三日は、
お母さんは、子供のことを案じて、仕事を手につきませんでした。

「つらくても、我慢がまんをしているのでないかしらん？ あんなことをいうのではなかった……。」と、思いおもわずらつていきますと、
 「僕ぼく、帰かえつてきた……。」と、入り口ぐちでした声こえは、たしかに、自分ぶんこの子この声こえでありました。母親ははおやは、またかおどろと驚おどろいて、飛び出としました。

「どうしたんだ？ 吉雄よしお……。」と、お母かあさんは、思おもわず、我わが子この顔かおをにらみました。

よくきくと、時計屋とけいやのおばあさんは、病びよう気で臥ねているのでした。吉雄よしおは、その看かん病びようのてつだいをさせられるのがいやさに、出でてきたというのであります。

「もう、お年としより臥ねていられるのだから、そんなこと、なんで

もないじやないか。」と、お母かあさんは、ひたすら、吉雄よしおが、勤つとめ
のいやさから出でてきたと信しんじて、しかりました。

「僕ぼくは、たんつぼのそうじなんか、させられるのはいやだ！」と、
吉雄よしおが、いいますと、お父とうさんは、これを聞きいて、

「子供こどもに、そんなことをさせるのは、先せん方ほうがよくない。いやが
るのは、もつともだ。」と、こんどは、お父とうさんが、吉雄よしおに味方みかた
されたのでした。

吉雄よしおは、家いえに帰かえると、いつも川かわのほとりにゆきました。川かわは、
村むらはずれの丘おかのふもとを流ながれていました。草くさの上うえに足あしを投げ出だし
て、あちらの空そらをながめるのが大好きだいすでした。彼かれはかつて、ここ
の景色けしきを絵えに描かいて、学がっこう校こうで先せん生せいにほめられ、その絵えは、張は

り出しになりました。また、ここを文章で書いて、甲をもらいました。

その日も、ここへやってくると、川の水はゆるく流れて、空をゆく、白い雲の影を、ゆったりとした水面にうつしていました。「釣りにくれば、よかつたな。」と、思っていますと、丘の上で、ちようど自分ぐらいの少年がくわをふり上げて、土を耕し、なにか植えていました。

「僕も、町へなんかゆかず、ああして働いたら、どんなにいいだろう……。」と、思っていると、その少年がうらやまれたのであります。彼は、少年のそばへゆきました。そして、二人は、じきに仲好しになってしまいました。

その少年しょうねんは、りんごの木きを植うえていたのです。体が弱よわいの
 小学校しょうがっこうを卒おえると、自分じぶんは果樹園かじゆえんを営いとなむことにしたので
 す。それで、自分一人じぶんひとりではさびしいから、

「君きみもお父さんとうや、お母さんかあが許ゆるされたら、ここへこないか。二
 人たりでいろいろなものものを栽さいばい培ばいして、愉快ゆかいに生活せいかつしようよ。」と、
 少年しょうねんはいったのでした。

「僕ぼくは、きつと許ゆるしてもらおうよ。」
 吉雄よしおは少年しょうねんと誓ちかいました。そして家いえに帰かえって、熱心ねっしんに頼たの
 んで、許ゆるしてもらったのです。

いま、この村むらで二人ふたりの少年しょうねんが、経営けいえいしている果樹園かじゆえんを
 知らぬものはありません。春はるのうらかな日ひに、ここを訪たずねると、

かわ
川べりには、^{むらさきほし}紫の星のようなヒヤシンスが、一面^{めん}にいい香り^{かお}を放^{はな}つています。また、真^まつ赤^かなチューリップが、金^{きん}色^{いろ}に日^ひの光^{ひかり}にかがやいています。

そのほか、いちごの畑^{はたけ}があり、夏^{なつ}にかけて、丘^{おか}のスロープには、^{おおつぶ}大粒^おなぶどうのふさが、みごとに実^{みの}るのでした。

^{ふたり}二人^{ふた}の少年^{しょうねん}園芸^{えんげい}家の^かの、うわさが世間^{せけん}に広^{ひろ}まるたびに、吉雄^{よしお}のお母^{かあ}さんは、喜^{よろこ}んで鼻^{はな}を高く^{たか}したのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「国民新聞」

1931（昭和6）年3月1日

※表題は底本では、「子供《こども》はばかでなかった」となっています。

※初出時の表題は「子供は馬鹿でなかった」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2020年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子供はばかでなかった

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>